

曉操法



二

曉  
操  
法  
書  
卷  
內

千八百六十七年第二月

英國開彙

英語  
ライフル

蘭語  
ミニール

# 雷銃操法

福澤氏藏版

雷銃操法卷之二

題言

慶應義塾圖書館蔵  
英國開彙ノ原

本音

清白

雷銃操法

卷之二

題言

卷之二

題言</p

英國ノ一「アート」ハ我一尺強ニ當ル  
同一「ヤールド」ハ三「アート」ニテ我三尺強ナリ  
同一「インチ」ハ一「アート」ヲ十二分ニレタル一  
今ニテ我ハ分三厘強ニ當ル  
同「ポント」ハ目方ノ名ニテ其一「ポント」ハ我百  
二十一反強ニ當ル  
同一時ハ我半時ナリ一分時ハ一時ヲ六十三  
分タル一分ナリ英語ニ「ミンニュト」云フ一抄  
時ハ一分時ヲ六十ニ分タル一分ナリ英語ニ  
セ「カンド」ト云フ

雷銃操法卷之二目錄

第四編下稽古

第三条狙ヒノ稽古

第四条身構ヘノ稽古

第五条空戦

第六条遠近ノ見手

第七条銃包ノ製作

第五編試験

第一条玉打

甲一人立チノ放戦

乙連戦

丙急戦

丁戦列ノ放戦

目録終

雷銃操法卷之二

福澤諭吉 譯

第四編下 稽古

第三条狙ヒノ稽古

第一 此稽古ニ於テハ兵卒ヘ雷銃ノ狙ヒ方ヲ  
教ヘ後ノ狙ヒヲ加減スル1ヲ知ラシム其法ハ  
筒ヲ自在臺ニ掛テ遠近ノ距離ヲ色々ニ狙ハシ  
ムルニ由テ其上達スルヤ否ヲ試ムベシ若シ自  
在臺ナクバ棒ヲ三本集メ其上ノ方ヲ綱ニテ結  
合スル欵又ハ雷銃ノ劍ヲ組合セテ地ニ立テ高

サ四フ一ト半ノ處ニ砂ノ袋ヲ掛テ此袋ノ上ニ

筒ヲ据レハ自在臺ノ代トナルヘシ

第二 稽古人ハ一ノ臺ニ付キ十人ヨリ多クス  
ベカラス錦々ニ雷銃ヲ勢テ一列ニ並ハシメ教  
師コヽニ出テ先ツ狙ヒノ大趣意ヲ教ユ其箇条

左ノ如シ

一則 狙ヒハ前後トモ右ニ傾ク可ラズ又左ニ

傾ク可ラズ

二則 狙ヒノ筋ハ後ノ狙ヒノ切目ニ前ノ狙ヒ  
ノ頂ヲ合セテ的ノ真中ヲ見通ス可シ

### 三則

眼ハ體ニ的ヲ覗<sup>チラヒスマ</sup>シテ筒又ハ前ノ狙ヒ

ニ目ヲ付ク可ラズ斯ク的ヲ覗ヘハ前ノ

狙ヒハ自然ニ見通シノ筋ニ掛ルモノナ

リ初心ノ間ハ動モスレバ的ヲ見ズシテ

前ノ狙ヒノミニ目ヲ留メ遂ニ見通シテ

定ル1能ハザル者アリヨク心得ベシ

四則 狙ヒノ矢ハ左ノ眼ヲ閉ベシ若シ出来ザ

ル者アラバ手拭ニテ片眼ヲ塞クベシ自

然ニ慣ル、モノナリ

第三

教師ハ又狙ニ大中小三通りノ差別アル

トノヲ辨解ス即チ左ノ如シ

後ノ狙ヒノ切目ノ底ニ前ノ狙ヒノ尖よのヲ合セ

テ見通スモノヲ小ノ狙ヒト云フ第一図ノ如

シ

後ノ狙ヒノ肩ト前ノ狙ヒノ尖ト同レ高サニ  
ナルモノヲ大ノ狙ヒト云フ第二圖ノ如シ  
後ノ狙ヒノ切目ノ中程ニ前ノ狙ヒノ尖ヲ合  
スルモノヲ中ノ狙ヒト云フ第三図ノ如シ

第一図



第二図



第三図



第四 右三通りノ狙ヒノ内ニテ平生ハ其中ヲ  
用ル規則ナリ且又大ト云ヒ小ト云フトモ其差  
僅ノヲニテ筒ノ勾配ニ格別ノ高低ヲ起スモノ  
ニモ非ズ故ニ放糞ノ氏其筒ノ持前ニテ始終玉  
ノ下ルモノニハ大ノ狙ヒヲ用ヒ其反對ナルモ  
ノニハ小ノ狙ヒヲ用ユベシ

第五 教師ハ上ニ述タル規則ヲヨク辨解シ次  
テ又稽古人ヲシテ其雷銃ヲ以テ百ヤールドノ  
的ヲ狙ハシム既ニ狙ヒヲ定レハ其佟筒ヲ自在  
臺ノ上ニ置キ當人ハ其傍ニ立シメテ教師自力

ラ其場所一行テ粗ヒノ正否ヲ改ム若シ其粗ヒ不正ナレバ當人ハ其位立ダセ置キ他ノ稽古人ヲ呼テ其粗ヒヲ示シ不正ナル箇条ヲ述ベシメ教師モ亦傍ヨリ斯ル不正ノ粗ヒヲ以テ放戻シナバ其彈道ハ斯クナル可シトノトヲ説キ次ノ稽古人ヲシテ改テ粗ヲ定メシム斯ノ如クスレバ稽古人ハ仲間同士ノ不出来ヲ見ルユヘ大ニ勵ムモノナリ

第六 右ノ稽古ハ百「ヤールド」ヨリ始メ五十「ヤールド」、次第ニ増シテ九百「ヤールド」ニ至ル

ベシ即チ九百「ヤールド」ハ雷鏡ノ限ナリ的ノ星ハ三百「ヤールド」迄ヲ六「インチ」ノ角トシ三百「ヤールド」以上ヲ十八「インチ」ノ角ト定ム斯ノ如ク次第ニ星ヲ大ニスル所以ハ的ノ遠クナルニ從テ前ノ粗ヒヲ見通スヲ難ケレバナリ  
第七 粗ヒノ稽古ハ眼力ヲ達者ニスルモノナリ遠丁ノ處ニ放戻セシニハ平生ヨリ心掛ケ實地ニテハ玉ノ届カザル所ニテモ小キ物ヲ見テ成失ケ眼力ヲ増ス可シ此箇条ハ固ク兵卒ヘ云ヒ聞カス可キナリ

## 第四条身構ヘノ稽古

第一 此稽古ニ於テハ生兵共ニ熟練シタル兵卒ヲシテ放戦ノ身構ヘヲ為サシメ或ハ立ナ或ハ跪キ一々其運動ニ氣ヲ附テ粗ヒヲ誤ルトナキヲ專一トス其大趣意ハ正シキ身構ヘニ筋骨ヲ習シ雷銃ヲ自由ニ取扱ヒ手ト眼トノ間ノ釣合ヒヲ取ルトナリ手ノ働く固ヨリ眼ニ從フモノナレ凡尚又コレヲ實地ニ施シ眼ノ向フ所ニハ雷銃ノ筒先モ向ヒ從テ指モ引金ニ觸ル、如ク自然ニ練磨ノ功ヲ積サル可ラズ

第二 小隊ノ調練ニ於テハ兵卒ヲ列ニ並バシメテ玉込放戦ノ身構ヘヲ教ユルトナレ凡此条ニ云フ所ノ身構ヘノ稽古ハ銃術ノ教師ニテ格別ニ意ヲ用ヒテ一人ヅ、ニ放戦スルトニ教ユルモノナリ

第三 身構ヘノ稽古ヲスルニハ兵卒ヲシテ進行ノ列ヲ爲サシメ立ツキハ雷銃ノ剣ヲハメ跪ク氏ハコレヲ外ス稽古人ノ數ハ教師一人ニ付十人ヨリ多カル可ラズ此人數ヲ一列ニ並ラベ人ト人トノ間ハ一步ヅ、離レテ的ヲ距ルト適

宜ノ所ニ止ラシム

第四 此稽古ヲ始ル前ニ教師ハ兵卒ヲシテ各、  
其狙フ所ノ的ニ目ヲ附ケシム但シ其的ハ屯所  
ノ壁ニ黒タ画キタルモノニテ大サ錢ノ如ク差渡  
バレカリ其中ニ四五分斗ノ白キ星ヲ記セリ的ノ  
高サハ三フート的トノ間モ亦三フートナ  
リ

第五 指揮官ハ一通り身構ヘノ稽古ヲ終レバ  
更ニ又コレヲ始ル手續キヲ尋ス殊ニ其第一段  
第二段ノ稽古ハ幾度モ繰返ス可キモノナリ故  
リ

ニ中隊ノ兵卒モ十人ヅ、ニ分チ其士官ノ直傳  
ニテ度々身構ヘノ稽古ヲ為ストアリ

第一段

此第一段ノ稽古ニ於テハ兵卒ヲシテ雷銃ヲ巧  
ニ取扱ハレムルヲ專一ノ趣意トシ其左ノ腕ヲ  
達者ニレ左ノ手先ヲ以テ自由ニ雷銃ヲ取舞ハ  
シ眼ノ向フ所ニ從ヒ脉ヲ動サズレテ雷銃ヲ肩  
マデ上ルトニ馴レシム故ニ此箇条ノ出来ルマ  
デハ幾度モ運動ヲ繰返シ少シノ不出来ニテモ  
見過ス可ラス且教師タラン者ハ其不出来ナル

町ヲ一々説得レスル不出来ヲ等閑ニシテハ實地ニ施レスル不都合アル可レトノイチ心得レム可レ

稽古ニ取掛ル前号令ノ言葉左ノ如レ

号令次第前列又は後列或は立ち或は跪き身構への稽古第一回

斯ク前以テ一度号令ヲ下シ置キ次ニ又号令スルト左ノ如レ

「ヤールド」の町用意

此号令ニテ稽古人ハ肩へ筒ノ身構ヨリ運動ヲ

始ム  
此運動ニ於テ教師ハ格別ニ心ヲ用ヒテ稽古人ノ身構ヘラ見ル可レ第一左ノ手ヲ以テ固ク雷銃ヲ持ツ其持ツ町ハ第三番ノ輪金ノ下ニテ地板ノ坐ニハ手ヲ掛可ラズ即チ此部分ハ筒ヲ構ル代ニ持ツ町ナリ第二用心金ノ下ニ右ノ手ノ指ヲ掛ルト第三軀ハ真直ニ立チ左ノ方ハ胸ヨリ足ニ至ルマヂ一直線タルト第四頭ヲ曲ゲベ足ハ曲金ノ形ニ踏分ルト第五眼ハ的ノ方ニ向ヒ頭モ同様タルベキト〇跪ク代ハ右ノ足ト

膝トヲ程ヨク構ヘテ躰ヲ固クシテ右ノ踵ニ腰  
ヲ据ベシ

構ヘ

此号令ニテ兵卒ハ以前ノ身構ヘニシテ躰、頭、眼、  
手先共ニ少シモ動カサス急ニ左ノ腕ヲ伸シテ  
右ノ肩ノ前ニ筒ヲ上ケ後ノ狙ヒヲ立テ臺尻ノ  
上面ヲ肩ノ高サト一様ニシ筒先ハ的ヨリ二三  
寸低クシ右ノ手ノ指ヲ用心金ノ内ニ入レ両臂  
ヲ下ノ方ヘ曲ベシ

斯ク身構ヘテ為シ又初ヘ返レトノ号令ヲ掛

テ再ヒ最初ヨリ仕直シ幾度モ繰返シテ其不  
出来ラ改メ十分ニ出来タル所ニテ構ヘニ三  
ト号令スルナリ

二

此号令ニテ右ノ肩ノ窪ニ臺尻ヲ當テ左ノ手ニ  
テコレヲ押付ク又同時ニ左ノ臂ヲ筒ノ下ニ入  
レ右ノ臂モ大抵同様ニシテ右ノ肩ノ前ニ出ス  
斯ク両臂ヲ筒ノ下ニ入ル、ハ其構ヘ方ヲ失支  
ニスルタメナリ但シ躰、頭、眼、手先ハ少シモ動カ  
サズ指ハ鉤ノ形ニ屈ケテ引金ノ前ニアレ氏コ

レヲ押ストナレ○跪ク代ハ左ノ臂ヲ左ノ膝ノ  
上ニ置ク

三

此号令ニテ指ヲ引金ヨリ外シテ用心金ノ下ニ  
置キ玉込ノ身構ヘラ為ス但シ躰頭眼手先ハ動  
カスナレ

弾キ金弛め 箭卸せ 箭放せ

此三ノ号令ニテ定式ノ運動ヲ為シ終ル  
右ノ如ク号令ヲ施シテ一通リノ運動ヲ終レバ  
次テ又稽古人ニ自分ニテ運動ノ速度ヲ見斗ヒ

最初力ラノ手續ヲ繰返シテ稽古セシム其時ノ  
号令左ノ如シ

一匁の鬱古遅速見斗ひ

此号令ニテ用意ヲサセ置キ次ニ又左ノ如ク号  
令ス

構  
八

此号令ニテ稽古人ハ互ニ其運動ノ遲速ヲ見合セテ最初カラノ手續ヲ爲ス

止  
め

此号令ニテ玉込ノ身構ヘテ為シ終ル

彈キ金弛め 筒卸せ 筒放せ

此三ノ号令定式ノ如シ

## 第二段

第二段ノ稽古ハ兵卒ヘ筒ヲ構ヘル運動ヲ教込ム  
一ナリ初ノ号令左ノ如シ

号令次オ前列又ハ後列或は立ち或は跪き身構への稽古オ二段

斯ク号令ヲ下シ置キ次ニ又号令スルト左ノ如シ

我ヤードの所用意

此号令ニテ肩ヘ筒ノ身構ヘヨリ運動ヲ始メ教師ハ矢張第一段ニ記セシ箇条ニ心ヲ用ユベシ構ヘ

此号令ニテ小隊調練第一段ノ第一第二ノ運動ヲ合セテ後ノ狙ヒノ切目ヨリ的ヲ見通ス

## 二

此号令ニテ筒先ヲ上ケ前ノ狙ヒト後ノ狙ヒトヲ合セテ的ヲ見通シ眼腕手先ヲ少シモ動カスナクサレモ震ハストナク引金ヲ引テ打金ヲ落トス此時尚モ眼ハ的ヲ見張リ且打金ヲ落ト

スマデハ呼吸テコラス可シ

三

此号令ニテ玉込ノ身構ヘテ為シ打金ヲ皆引上  
ク可シ

右ノ如ク運動終テ又初ヘ返キトノ号令ヲ下  
シ幾度モ其順序ヲ繰返ス可シ真直ニ躰ヲ構  
ヘ各、其狙ニシ的ヲ見テ眼ヲ動カサバルヨウ  
兵卒ヘ心得シムルノ肝要ナリ

弾キ金弛め

筒卸セ

筒放セ

右三ノ号令定式ノ如シ

第三段

此稽古ニ於テハ専ラ眼ト手トノ釣合ヲ馴ラス  
1ニテ中リヲ求ルニハ久ク可ラザル箇条ナリ  
故ニ兵卒タラン者ハ稽古ノ時ニアラズトモ平  
生コレヲ心掛テ怠ラサルヨウ丁寧ニ云ヒ聞カ  
ス可シ但シ狙フ可キ目當ナクシテ筒ヲ構ルハ  
無用タル可キナリ此稽古ヲ始ルキノ号令左ノ  
如シ

号令次オ前列又ハ後列或は立ち或は跪き  
身構への稽古第三段

右ノ如ク一ト通リ号令ヲ下シ置キ又号令スルト

左ノ如シ

込

此号令ニテ筒乍せノ身構ヘヨリ急ニ玉込ヲ為ス但シ筒先込ノ雷銃ナレバ込矢ヲ廻ハシ右ノ方ヨリ手數ノ順ヲ計テ雷管ヲ附ルマデノ身構ヘチナス教師ハ各兵卒ノ身構ヘニ氣ヲ附ケ其次ノ運動ヲ為ス可キヤ否ヲ見ル

或ヤードの所用意 或ハ

前列又ハ後列跪キ或ヤードの所用意

此号令ニテ狙ヒヲ加減シ打金ヲ皆引揚テ的ノ方ヲ見ル

或ヤード

右ノ如ク前以テ用意ノ号令ヲ下シ置キ

始め

此号令ニテ兵卒ハ左右同列ノ人ニ拘ハラズ自分ニテ運動ノ速速ヲ見斗ヒ雷管ヲ打チ又玉込ノ身構ヘチ為シテ玉ヲ込ム

打方止め

此号令ニテ兵卒皆玉込ヲ終リ筒ヲ卸ス

稽古人ハ立ツ身構へニテ右三段ノ稽古ヲ一通  
リ終リ次ニハ又跪テ同様ノ身構ヘヲ為ス可シ  
筒ヲ構ヘタル氏ハ兵卒ノ身構ヘヲ細密ニ吟味  
セザル可ラズ即チ粗ヒハ前後共ニ真直ニ立ツ  
可レ筒ハ左ノ手ヲ以テ固ク肩へ押付ベレ引金  
ヲ引クニハ筒先ヲ下ゲズ打金ノ落ルマデハ腕  
手先共ニ少レモ動カス可ラズ眼ハ的ヲ見張テ  
打金ノ落チレ後マデモ眼ヲ見ル可ラズ教師ハ  
稽古ノ間其引受ノ稽古人ヲ一人ヅヽ順々ニ氣  
ヲ附ケ其身構ヘノ不出来ヲ見出シテハコレヲ

改メサセ又或ハ稽古人ノ前ニ立チ自分ノ眼ヲ  
的ニシテコレヲ粗ハセ其粗ヒヲ附ル遅速ト引  
金ヲ引ク氏粗ヒヲ動カス1ナキヤ否ヲ試ム斯  
ク丁寧ニ心ヲ用ヒテ其不出来ヲ見出セハ其度  
毎ニ初ヘ返<sup>セ</sup>トノ号令ヲ掛テ又筒ヲ構ヘサセ  
三度モ四度モ繰返シテ後ニ玉込ノ身構ヘニ及  
フ可レ

### 第五条空戔

第一 生兵ニ玉ヲ込テ放糞スルヲ許ス前ニ先  
ツ火薬ノミニテ空戔ノ稽古ヲ為サレム此稽古

ハ專ラ兵卒ノ躰ヲ丈夫ニ馴ラシテ放戻ノキ筒  
ノ戾リニ堪ヘシムル趣向ナリ空戻ノ數左ノ如  
シ

一人ヅヽ放戻 十戻

同列ノ放戻 四戻

立ツ身構ヘ

連戻 六戻

一人ヅヽ放戻 十戻

十戻

跪ク身構ヘ

第二 此稽古ニ於テ教師ハヨク心ヲ用ヒ兵卒  
ノ躰腕手先ノ取舞ハシ引金ノ引キヨウヰニ粗

ヒノキ頭ノ構ヘ方等ニ不出来ノイアレバ直ニ  
コレヲ改メシム可シ若シコレヲ改メサレバ中  
リヲ求ム可ラザルハ勿論ノイニテ且玉ヲ込テ  
放戻スルキニ至テハ其不出来ヲ自由ニ改ル  
モ難キモノナリ

第三 教師ハ又稽古人ニ辨解スル1アリ即チ  
火薺ノ戻スルキハ其勢ニテ膳中ヨリ玉ヲ打出  
シ又同時ニ筒ヲ後ノ方ヘ押戻スカヲ起スコレ  
チ筒ノ戾リト名ク故ニ放戻ノキハ臺尻ヲ肩ノ  
窪ニ強ク押付テ筒ノ震動ヲ防ケベシ都テ自分

所持ノ筒ヲ大丈夫ノモノト思ヒ少シモ臆スル  
1ナクレテ放哉スレハ必ス手際ヨキモノナリ  
第四 壱尻ヲ肩ニ押付ルニハ壹尻ノ金ノ真中  
ヲ肩ノ窪ニ當ツヘシトノ理合ヲ説キ尚又兵卒  
ニ以前ノ論説ヲ思出サレムル1アリ即チ第二  
条手銃ノ論説ニテ玉ノ筒ヨリ龜出ル氏ハ放發  
線ノ方ニ向フユヘ筒ノ庚リモ矢張放發線ノ向  
ニテ後ノ方ヲ押ストノ1ナリ○元來壹尻ノ曲  
リタルハ筒ノ見通シヲヨクスルタメナリ斯ク  
曲リタル壹尻ヲ肩ニ當テ放發スルユヘ筒ヲ押

庚ス力ハ上ノ方ニアリテコレニ對ル肩ノ力ハ  
下ノ方ニアリ故ニ放發ノ時動モスレバ筒先ノ  
上ルモノナリ此理合ヲ速ニ合點セシニハ贍ノ  
真中ニ筒ヲ押返スカノアルモノト思フ可シ然  
ル氏ハ其力ハ壹尻ヨリ上ノ方ニアル1明白ナ  
ルヘレ

第六 条遠近ノ見斗ヒ

第一 此稽古ニ於テハ生兵矣ニ熟練シタル兵  
卒ヘ色々ノ距リニアル人又ハ物ノ大サト取手  
トチ見分ル1テ教ニ

第二 稽古打ノサハ的ノ丁數定リタルノナレ  
氏實地ノ敵ニ向テハ圓ヨリ其遠近ヲ知ル可キ  
ニ非サレバ見斗ヒヲ以テ速ニコレナ測リ雷銃  
ノ勾配ヲ加減シテ定式ノ如ク放發セザル可ラ  
ス

第三 兵卒ヘ眼ヲ以テ遠近ヲ見積ルヲ教シ  
ニハ遠近見斗ヒノ試験ヲ許ス前ニ先ツ次ノ箇  
条ヲ稽古セシム可シ

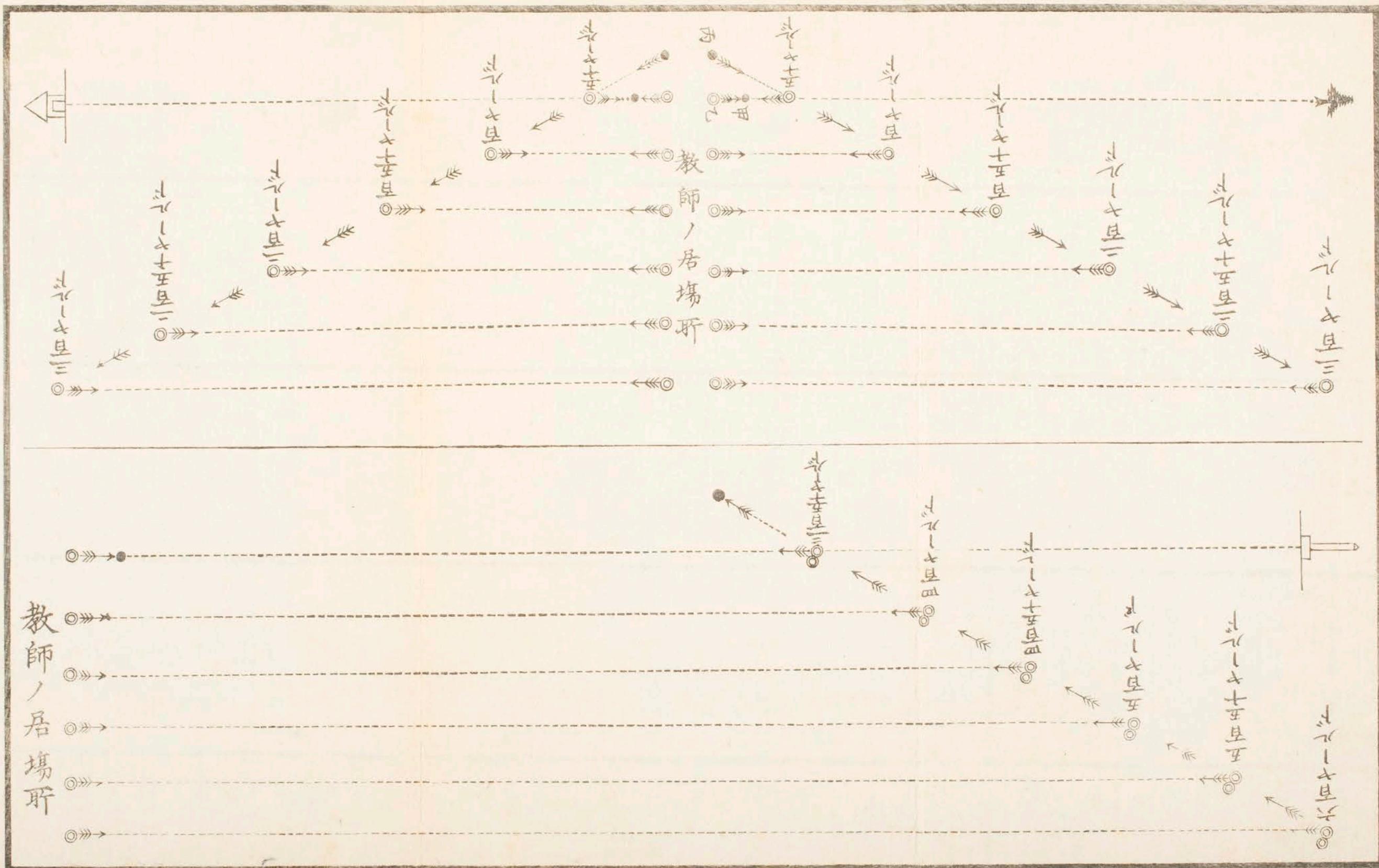
第四 稽古人ノ居場所ヲ距ル一五十ヤールド  
百ヤールド百五十九ヤールド二百ヤールド二百

五十ヤールド三百ヤールドノ所ニ各人ヲ立タ  
セ躰ヲ真直ニシテ稽古人ノ方ヘ向ヒ見分ノ目  
印トナラシム

第五 右六所ノ場所ヲ定ル仕法左ノ如シ教師  
先ツ遠方ニアル樹木又ハ建家等著シキ物ヲ目  
當ニ立テユレヲ見通シテ其見通シノ筋ニ甲乙  
二人ヲ向合ニ立タセ其間ヲ二十ヤールドト定  
メ又乙ヨリ左或ハ右ノ方十一歩於テ歩ニフリトニ  
半ナノ所ニ丙ノ一人ヲ立タセテ目當ノ人ト為  
ス然ル後ニ兵卒六人前後二人ヅ、三行ニ立テ

乙ノ場所ヨリ真直ニ進ム「五十ヤールド」ニシテ止リ第三行後列ノ一人甲乙ノ筋ニ立テ斜ニ丙ノ方ヲ見通シ此時ニ甲ヲ一人ハ去ラシム又コレヨリ斜ニ進ム「六十一歩即<sup>フ</sup>五十ヤールド」零六分ノ五ノ所ニ至テ第三行前列ノ一人立止リ初五十ヤールドノ所ニ立ナレ人ト丙ノ人トチ斜ニ見通シテ其居場所ヲ定ム斯ク次第ニ六十一步ヅ、斜ニ進テ其所ニ一人ヅ、立止リ行列既ニ定テ後ニ目當タリシ丙ノ人モ去ラシム第四圖ヲ見ルベシ

第四圖



第六 前条ノ如ク目印<sup>メイ</sup>ノ人六人ヲ並ヒ立タシ  
ムルニ五十ヤールド百ヤールドト次第ニ遠ク  
ナルニ徒ヒ横ノ方ニモ順々ニ距リテ其形ヲ斜  
ニセシ譯ハ稽古ノ場所ヨリ何レノ目印ヲモ見  
ラル可キヨウニスルタメナリ

第七 士官又ハ無級士官ニテモ人數多クアレ  
バ教師ノ手傳トレテ稽古ノ場所ニ出テ各一人  
ヅ、六人ノ目印ヲ相對シタル所ニ立ツ但シ教  
師ハ自分ノ左ノ方へ稽古人ヲ引連レ五十ヤー  
ルドノ目印ニ向テ立ツ

第八 稽古ノ時教師ハ其日ノ天氣ノ晴陰、日影ノ様子并ニ近處ニアル山ナドノ形勢ヲ説キ其摸様次第ニテ物ノ形モ色々ニ変リテ見ユルトノイヲ心得シム

第九 教師ハ五十ヤールドノ目印ニ向テ立チ稽古人ヘ目印ノ人ノ形、其携ル軒ノ武器衣裳ノ部分ヲ示ス但シ是等ハ稽古人ノ眼ニモ明ニ見ユルナレ氏尚細密ニ及ヒ見ヘ難キ軒マテモ指示シ次テ又銘々ノ眼ニ見得ル軒ノ部分ヲ聞紀シ再三コレヲ試テ此位ノ距リニテハ人ノ形ハ

斯ク見ユルトノイヲ合點セシム右終テ次ノ場

軒ニ行カシム

第十 百ヤールドノ目印ニ向テ立ツ教師

教師

場所ニ付一入モ其教授ノ仕方ハ同様ニテ五十

ヤールドノ軒ニテ見シ部分ヲ見分ルトテ教へ

且其以前ノ場所ニテ見シ目印ト此場所ニテ見

ル目印ト其摸様ノ異ナル軒ヲ區別セシメ一人

毎ニ色々々ノトテ聞紀シテ次ノ場所ヘ行カシム

斯ク順々ニ場所ヲ経テ三百ヤールドノ軒ニ至

ルマデ教授ノ法ニ異ナルトナシ

第十一 三百「ヤールド」ノ目印ニ向テ立ワ教師  
ハ目印ノ形、衣裳武器ノ内、明ニ見ル可キ部分ヲ  
示スハ勿論、彷彿トシテ見ヘ難キ所マデモ指示  
シ又全ク見ヘザル部分ハ其次第ヲ云ヒ聞紀シテ  
第十二 教師ハ稽古人へ種々ノトチ聞紀シテ  
其返旨一様ナラザルトモ怪ム可ラス眼力ノ効  
ハ人々ニ由テ異ナルモノナリ

第十三 一通リ稽古ヲ終リタル者ハ目印ノ場  
所ヘ入替リ初メ目印トナリシ者ヘ稽古ヲ為サ  
シム故ニ惣稽古人ノ數ハサクモ目印ノ一陪ニ

テ十二人ヨリ減ス可ラス

第十四 稽古人ノ數大勢ナレバ目印ノ場所ヲ  
右ト左トニ分ツ且目印ノ人ヘ一陪ノ遠丁ヲ見  
セシムルタメ左右ノ場所ヲ正シク相對スル1  
第四圖ノ如クス

第十五 右ノ如ク一同ノ兵卒残ラズ稽古ヲ終  
レバ次テ又三百「ヤールド」ノ限ノ内ニテ遠近ノ  
見斗ヒテ稽古スベシ其法左ノ如シ○教師ハ稽  
古人ヲ引連レテ最前稽古シタル場所ヲ替ヘ又  
其人數ノ内ヨリ一人ヲ引出シ遠近不定ノ所ニ

至テ立タセ置キ其餘ノ稽古人ヘ其遠近ノ見積  
ヲ為サシム

第十六 教師ハ稽古人ノ右ノ方ノ前三歩ノ所  
ニ立チ一人ヅ、其前ニ呼出シテ錦々ノ見込ヲ  
述シメコレヲ手帳ニ記ス但シ遠近ノ數ハ五ヤ  
一ルド<sup>マ</sup>ナ本トシテ増減シ譬へハ七十ヤールド  
ヨリ遠レト思ヘバコレヲ七十五ヤールドト云  
フベシニヤールドノ差ハ問フナシ都テ此  
間ハ無言ニテ見込ヲ述ルニモ低聲ニテ云フベ  
シ然ラザレバ互ニ人ノ見込ヲ聞テ自分ノ思フ

所ヲ変ルトアリ○右ノ如ク錦々ノ見込ヲ述置  
キ其見込ニ從テ所持ノ雷銃ニ粗ヒノ加減ヲ為  
ス

第十七 既ニ稽古人ノ見込ヲ帳面ニ記シ終レ  
バ念ノタメ一度コレヲ讀聞カセ置キ測量ノ道  
具ヲ以テ正シク其遠近ヲ測ル欵或ハ又其道具  
ナケレハ教師ノ立合ニテ稽古人ヘ其間ヲ歩行  
セ歩數ヲ以テコレヲ測ル但シ百二十歩ヲ以テ  
百ヤールド<sup>マ</sup>ニ當ル法ナリ右ノ如クシテ其遠近  
分リシ上ニテ一同ニコレヲ知ラシム

第十八 生兵ハ四日ノ間右ニ云ヒシ如ク三百  
ヤールドマデノ稽古ヲ為シ又其次ノ四日ノ間  
ハ六百ヤールドマデノ稽古ニ掛ル其仕方三百  
五十ヤールドヲ始トシヨリ次第ニ五十ヤ  
ールドヅ、テ増シテ六百ヤールドニ至リ最初  
ハ定リタル目印ヲ見分ケ次ニハ不定ノ遠近ヲ  
見積ルト三百ヤールド以下ノ稽古ニ異ナルト  
ナレ但シ目印ノ人ヲ増シテ一尋ニ二人若クハ  
三人モ置クトアリ第四圖ヲ見ル可シ

第十九 三百ヤールド以上ノ所ニテ不定ノ遠

近ヲ見積ル代ニ測量ノ道具ナケレバ稽古ノ人  
數ヲニニシテ左右ニ引分レ両方共ニ遠近不定  
ノ場所ニ止テ列ヲ正シ互ニ相向合テ其間ノ距  
ヲ見積リコレヲ帳面ニ記スト以前ノ如クシ則  
チ両方ヨリ歩數ヲ計テ互ニ相進ミ其出逢フ所  
ニテ両方ノ歩數ヲ合セ遠近ヲ知ルベシ斯ノ如  
クスレバ歩行ノ手間ヲ省キ時ヲ費スト少シ  
第二十 教師ハ此稽古ヲ催ス度毎ニ成ベキ丈  
ヶ其方角ヲ変ヘ天氣ノ模様モ相異ナル日ヲ撰  
ヒ兵卒ヲ實地ノ變化ニ馴ストニ心ヲ用ユベシ

第二十一 遠近見斗ヒ一日ノ稽古ハ定リタル  
目印ノ入ヲ見分ル稽古ヲ一ト通り終テ又遠近不  
定ノ所ヲ見積ルト三度ト定ム

### 第七条銃包ノ製作

此箇条ハ筒先込ノ雷銃ヲ勢ル兵卒ノ  
ミ稽古ス可シ

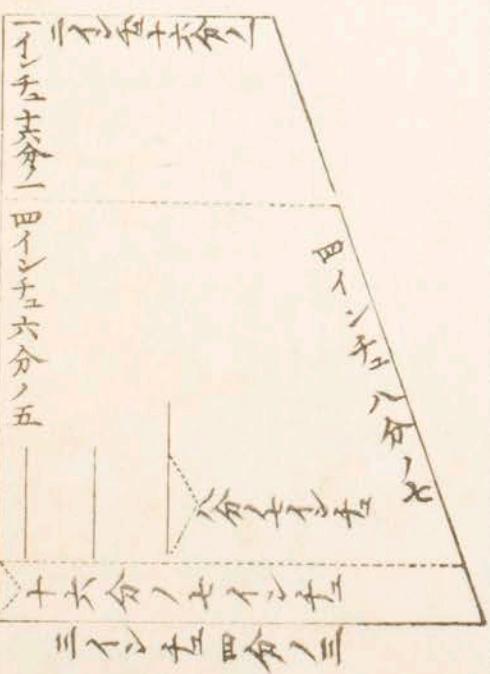
第一 生兵ハ銃包ヲ作ル法ヲ稽古ス可シ其手  
續左ノ如シ  
第二 雷銃先ニ馬上筒ノ銃包ヲ作ルニ紙ヲ切  
ルト第一第二第三図ノ如クレ次ノ手續ニ及フ

第一圖

### 真形二分ノ一

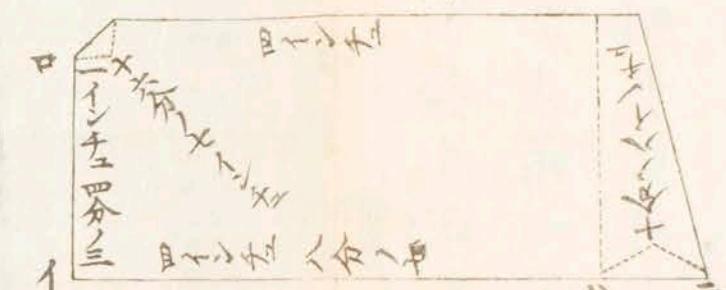
上袋

第三圖

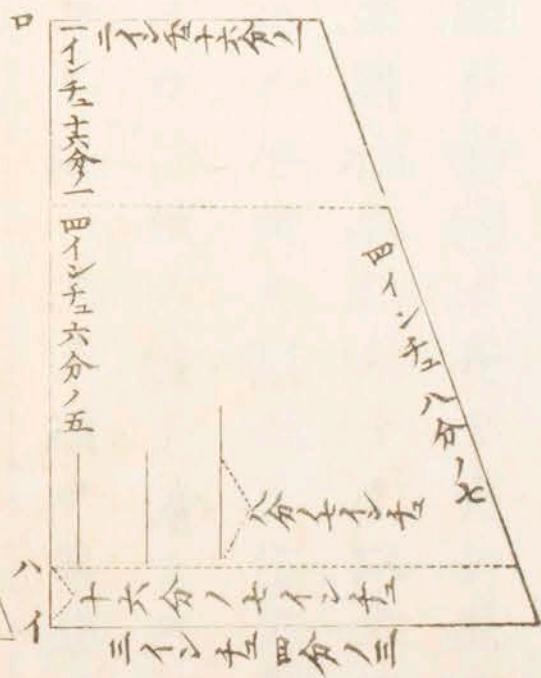


# 真形二分ノ一

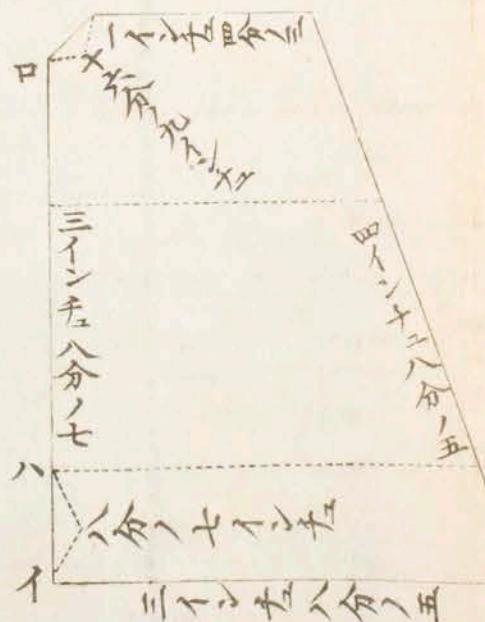
第一図



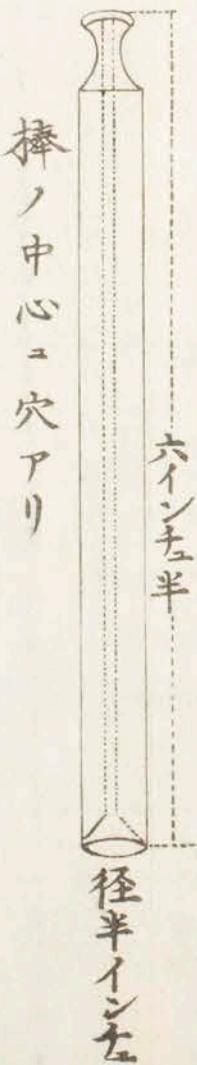
第三図  
上袋



第二図  
中袋



第四図  
形木



棒ノ中心ニ穴アリ

第五図  
栓木



第六図  
銚包ノ侧面



火薙ノ袋ヲ作ル法 第四図 秋木ノ下ノ端ヲ第一  
一図 厚キ紙ノ端①②ニ等シクシテ①②ノ端ヨ  
リ卷キ二卷キ半斗リ固ク卷テ此上ニ第二図中  
袋ノ紙ノ下端①②ノ所ヲ四分ノ三インチ残シ  
テ①②ノ端ヨリ卷キ終テ形木ノ下ニ餘リタル  
端ヲ八分ノ七インチ即チ①②ノ長サ丈ケ形木  
ノ窪ノ内ニ折込ミ第五図 桧木ノ先キヲ以テ程  
ヨク押付ケ玉ノ頂ヲハメル穴ノ形チテ作テ其  
間ヨリ火薙ノ漏ザルヨウニ紙ノ皺ヲ滑ニス  
火薙ノ袋ト玉トヲ取付ル法 玉ノ頂ヲ菜袋ノ

穴ニ固クハメ第三図上袋ノ紙ノ端①②ノ所ヲ  
半「イン」左程玉ノ下端ヨリ残レテ③④ノ端ヨリ  
卷キ玉ト菜袋ト、テ固ク一處ニ卷テ玉ノ下ニ残  
リタル端ヲ撮寄セ糸ニテ結ヒ終テコレナ墨ノ  
上ニ立テ片手ニテ菜袋ヲ押ヘ片手ニテ形木ヲ  
抜キ玉ト菜袋トノ離レザルヨウ用心スベシ  
火薺ノ袋ニ菜ヲヘル、法菜袋ノロニ漏斗ヲ  
挿シテ火薺ニ「ダラム」半ヲヘル或ハ又筒ノ種類  
ニ由テヨリ少キ1モアリ但シ稽古ノ代ハ  
火薺ノ代ニ砂ヲ用ユ○火薺ヲヘル、ニハ一粒

タリトモ上袋ト中袋トノ間ニ入ラザルヨウ用  
心ス可シ既ニ分量大ケノ菜ヲ入レバ上袋ト中  
袋トノ上端ヲ捻テ下袋ヲ締メ菜ノ上ニ軽ク押  
付ケ置ク第六図ハ銃包ヲ切割テ内ノ摸様ヲ示  
シタルモノナリ

上袋ノ紙ニ筋目ノアルハ放戻スル片玉ト袋ト  
ヲ離レ易キヨウニシタルモノナリ  
銃包ヲ塗ル法 銃包既ニ成就スレバ其下端ヨ  
リ玉ノ肩ノ所マデ蜜蠟ヲ塗ル可シ若シ蜜蠟十  
クバ獸脂ニテモヨレ

第三 一中隊ノ内ヨリ少クモ十二人ハ毎年銃包製作ノ稽古ヲ為ス可レ

### 第五編

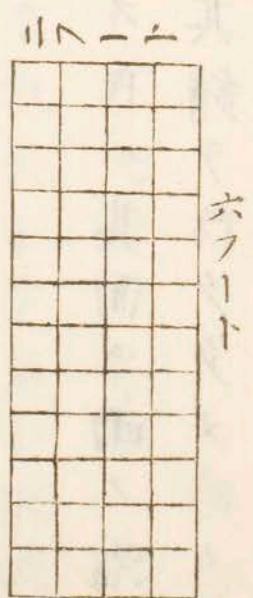
#### 試験

##### 第一条玉打

一 士官一人彈道ニ居ルニ非サレハ放譖ス可  
ラス

二 的打ハ下、稽古ノ出来不出来ヲ試ル證據ナ  
リ下稽古ヲ勉強シタル者ハ的打ニ於テモ必ス  
手際ヨキモノナリ

#### 第一圖



三 的ハ高サ六アート巾ニアート鉄ニテ製レ  
雷銃ノ玉ヲ受テ破レザル程ニ大丈夫ナルモノ  
ナリ又中リノ界ヲ見易クレ且コレニ星角ヲ画  
クニモ其寸法ヲ取ルタメ的ノ面ヲ縱横ニ刻テ  
六 インセグ、ノ四角ニ分ワ第一圖ノ如シ  
四 胡粉ヲ阿膠アガウノ水ニ解テ的ノ面ヲ白ク塗ル  
又星ヲ黒クレ角ノ筋ヲ記スニハ阿膠ノ水ニ油

煙ヲ解シタルモノヲ用ニ右白色黒色ノ混マゼ和物ハ壺ニ入レテ的ノ傍ニ備置ク可レ

五 的ハ臺ノ上ニ据置キコレヲ用ル片ハ真直ニ立ツ可レ

六 的ヲ取扱フニハ成ル夫ヶ損セザルヨウ用心シヨレヲ倒スニモ意ヲ用ヒテ靜ニス可レ扣ノ棒ヲ菟々レク取テ其佟倒スナドハ必ス無用ナリ

七 的ヲ用ヒ終テ倒ス氏ハ其面ニ雨ノ溜ラ又ヨウコレヲ斜ニス且其錆ヲ防クタメ時々錆留

ヲ全替ベレ

八 的ノ損スルトアレバ士官ノ寄合ニテコレヲ改メ其損シタル本ヲ取孔シテ若レ取扱ノ等閑ニ由テ出来シトナレバ兵卒共ヘ割付テ其入用ヲ出サシム

九 檜古打ノ氏ハ師範役ノ命ニテ無級士官ヘ勤上リノ兵卒手底ヲ負タル者歟又ハ軍役ナキ者六人斗ヲ引連テ的ヲ掃除レ相圖ノ筒ヲ放談レ弾道ニ徃采ノ入ノ出又ヨウ見張ヲ番ヲスル等其外種々ノ用事ヲ勤メシム此兵卒等右ノ如ク當番ヲ勤

中リノ場所	旗ノ色	板ノ色	中リノ位付
角外	白又ハ黄	黒 <small>的ノ股へ出レ次 テ又其前ニ出ス</small>	一
星	紅ト白	白	二
跳躍	紅色 <small>ヲ</small> 的ノ前ニテ振舞ス	跳ノ印	三
外レ	無點		四

十一 跳躍トハ放戻シタル玉一度ヒ地ニ着キ又猖揚テ的ニ中ルモノナリ此中リニハ紅色ノ旗ヲ的ノ前ニ二度振舞シテ相図トナス但レ当入ノタメニハ外レモ同様ニテ位付ノ點ヲ與ヘサレヒ帳面ニハ跳ノ字ヲ記シ置ク

十二 放戻ヲ止ル相圖ニハ紅色ノ旗ヲ用ヒ的ノ場所ニテ的ヲ塗替ル等ノ用事アリテ放戻ヲ止シトスルキ此旗ヲ引揚レバ放發ノ場所ヨリコレニ應シテ相圖ノ筒ヲ放ツ故又ハ旗ヲ揚ケ此相図ヲ見ルマデハ何等ノ急用アルトモ玉見

ノ小屋ヨリ出ベカラズ且玉見ノ者其的ノ所ニ  
出ル間ハ紅色ノ旗ヲ引揚ケ置ク可レ○放矢ノ  
場所ヨリ放矢ヲ止ルニ相岡ノ筒ヲ放テバ的場  
ヨリコレニ應シテ紅色ノ旗ヲ揚ケ又放矢ヲ始  
ル相圖ヲ放テバコレニ應シテ旗ヲ下ス○的場  
ニ止矢ノ红旗見ユル間ハ何等ノイアルトモ決  
シテ放矢ス可ラズ一大事ノ法則ナリ

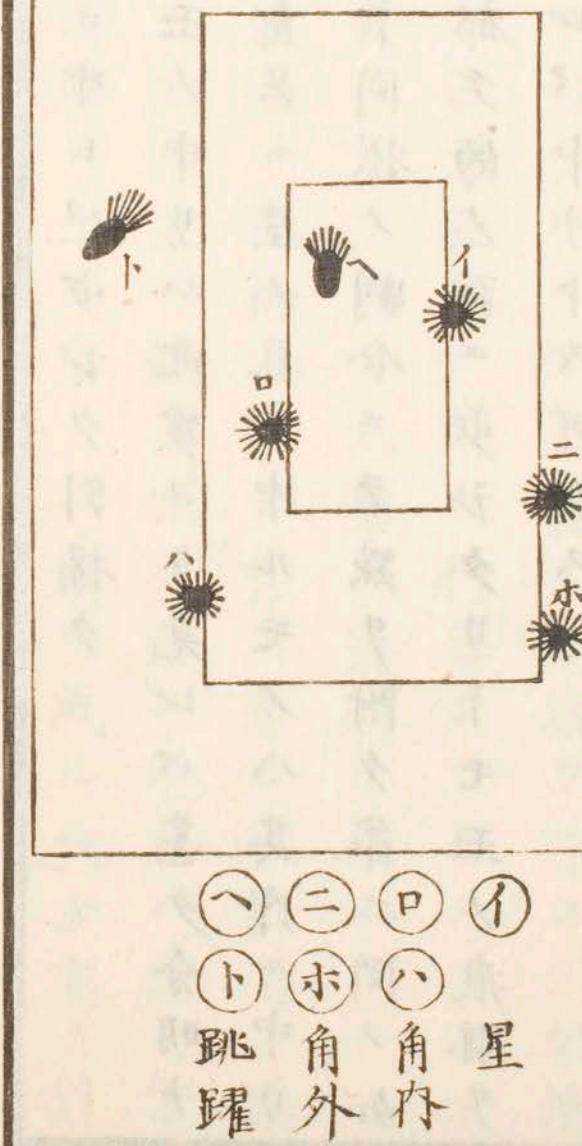
十三 放矢ノ玉的ノ右ノ方ニ中レバ相岡ノ旗  
ヲ揚ルニ右ノ方ヘ傾ケ左ノ方ニ中レバ左ノ方  
ヘ傾ク又的ノ上ニ中レバ旗ヲ成ル丈ヶ高ク引

揚ケ下ニ中レバ少レク引揚ク

十四 玉ノ中リハ近處ヨリ見レバ甚夕分明ナルベシ角先ニ星ノ界ニ中ルモノハ其内ニ中リシモノト同様ノ割合ニテ點ヲ附ク第二岡ノ如シ其他都テ的ノ面ニ少シタリトモ玉ノ痕跡ヲ遺サ、レバ中リトス可ラス

十五 玉ノ中リヲ見又跳躍ヲ見ル者モ其内ノ一人ハ無級士官ナリ玉ノ中リヲ見ル無級士官ハ色々ノ中リヲ見テ間違ナク其相圖ヲ為シ且手帳ヲ扣テ星、角内、角外、跳躍、外レ、ト區別ヲ立テ

一 痢毎ニコレヲ記シテ相圖ニ間違ナキ證據ト  
ナス○跳躍ヲ見ル者ハ眼ヲ銳クシテ彈道ヲ見  
張リコレヲ見レハ則チ聲ヲ疾シテ跳躍ト呼フ



十六 放疾スル者ハ組合ヲ分テ稽古ノ場所ニ  
進出ワ其人數一度ニ二十人ヨリ多カル可ラス  
斯ク人數ヲ分ウ所以ハ一組ノ者放疾シ終レバ  
直ニ他ノ組合ト入替テ時ヲ延引スルト無ラン  
ガタメナリ○稽古人ノ階級ヲ正シテ放疾スル  
片ハ上等ノ者ニテ都合ヨキ時ヲ撰フトナリ  
十七 放疾ヲ始ル前ニ稽古人ノ名前ヲ帳面ニ  
記シ其順序ニ從テ稽古場ニ立ツ可シ  
十八 士官又ハ無級士官一人稽古場ニ居テ帳  
面ヲ扣ヘ稽古人ノ姓名ヲ一人ヅ、改メ置キ其

姓名ノ上ニ中リノ点ヲ附ク

十九 稽古場ノ帳面ニ記スニ石筆ヲ用ユ可ラ  
ス必ス墨ニテ認メ若シ書損アレハ細ク筋ヲ引  
キコレヲ消シテ其傍ニ書入レ且證據ノタメ帳  
面ヲ預ル中隊ノ士官コレニ印ヲ附ク可レ此規  
則ヲ心得バシテ或ハ書損ノ片小刀ヲ以テ紙ヲ  
削リナドシテ書入ル、トモ其書ハ法ニ於テ通  
用ス可ラス

二十 稽古人ハ玉込ヲスルニモ士官ヨリ号令  
ノ言葉アリ放戻ノ用意既ニ整ヘバ稽古場ノ右

ノ方ニテ相団ノ筒ヲ放チ的場ノ红旗モコレニ  
應レテ下ル則チ稽古人ニ号令シテ前後二列ニ  
並ヘ放戻ノ順序ハ前列ノ右ヨリ始テ左ニ終リ  
又後列ノ右ヨリ始テ左ニ終ル放戻ノ順ニ當ル  
者ハ列ノ前ニ進出ルヲ一步ニシテ放戻シ終テ  
肩ヘ筒ヲ上ケ其玉中ル氏ハ相団ノ旗ノ揚ルヲ  
見テ右ヘ向キ廻テ列ノ後三歩ノ所ニ退ク斯ク  
頃々ニ放戻シ右ノ一人放戻終レバ左ノ者ハ直  
ニ進出テ用意テナスサレ氏先ノ放戻中リナレ  
バ其相団ヲ見ルマデハ次ノ筒ヲ構ベカラス○

右ノ規則ニ従テ一順放戻シ終レハ前列後列共ニ三歩ヅ、後ニ列スル形トナル次テ又号令ニ従ヒ以前ノ場所ニ進テ列ヲ正シ放戻スルノ初ノ如シ  
二十一 稽古人ノ放戻スルキ其身構ニ不出来ノアアルトモ傍ヨリ戯言スレバ其精心ヲ混雜シテ粗ヒヲ誤ルエヘ教師ハ謹テ黙止ス可シ然レ氏其出来不出来ハヨク見分ケテ不出来ナル者ヘハ放發ノ後ニコレヲ云ヒ聞カセテ以後ヲ改メシム可シ

二十二 的ニ中リノ數増シテ見分ケ難クナル代ハ其面ヲ塗替ベシ其時ニハ甲比丹丸ニ玉見ノ士官ニテ中リノ數ト其帳面ニ記シタル數トヨク引合セ相違ナキ所ニテ中リノ痕ヲ消シ新ニ塗ル可シ

二十三 一ノ的ニテ打方終レバ惣人數ノ中リヲ合セテ其數ヲ改メ則チ止發ノ相図ヲ放戻シテ甲比丹又ハ他ノ士官一人の的ノ場所ニ行キ玉見ノ士官ト共ニ的ノ中リ數ト帳面ト引合セ若レ相違アレバ帳面ノ數ヲ増減シ其數既ニ定リ

タル上ニテコレヲ惣人數ニ割付ケ平均ノ數ヲ  
知ルヘシ○兵卒ヘ各、其中リノ點數ヲ讀聞カス  
ル片譬ヘハ角内ノ中リテ帳面ニハ角外ト記シ  
タル等ノヲアリテ兵卒ハ自分ノ心覺ニテ其間  
違ナル趣ヲ訴レハ尚又角内ノ中リト角外ノ中  
リトナ取調べ其上ニテ事實角内ノ方ニ中リ多  
ケレバ帳面ヲ扣ル士官ノ取斗ヒニテ右兵卒ヘ  
ハ点ヲ増ス可シ

二十四 右ノ如ク中リノ惣數定テ帳面ニ記シ  
玉見ノ士官コレニ調印シ甲比丹又ハ他ノ士官

モコレニ加印ス然ル後コレヲ寫取り師範役又  
ハ其助役ニテコレヲ改メ相違ナキ證據ヲ記シ  
テ稽古場掛リノ差岡役ニ渡レ次テ又一同ニ布  
告ス

二十五 生兵ノミノ稽古打ナレバ中リヲ記シ  
タル書附ニ調印スル者ハ差岡役ト玉見ノ士官  
トナリ此書附ニ師範役又ハ助役ノ加印ヲ押ス  
ノミニテコレヲ寫取ルヲナシ但シ師範役并其  
助役二人ノ内一人ハ必ス稽古ノ席ニ出テ取締  
チ為スアナリ

二十六 帳面ニ名前アリテ稽古ニ出ザル者ア  
レバ其名前ノ所ニ欠席ノ次第ヲ記ス可シ

二十七 稽古終テ屯所ニ帰レバ中隊ノ教師ハ  
銃術ノ稽古試験ト云フ帳面ヲ出シテ當日兵卒  
ノ得レ中リノ点數ヲ銘々ノ名前ノ上ニ記シ置  
ク可シ○生兵ノ得レ点數モ同様ノ次第ニテ差  
圖役コレヲ記ス可シ

二十八 一日ノ稽古ニ堪ヘズレテ其終ラント  
スル代ニ一人放戻ヲ止ル者アルトモ其者ハ矢  
張終日稽古レタル者ト同様ニ取扱ヒ中リノ点

チ計テ甲乙ノ順ヲ定メ且其点ヲ惣人數ノ点ノ  
内ニ加ヘテコレヲ平均ス可シ

二十九 二三戦放戻シ急病ニテ退席スル者ア  
レバ其者ハ初ヨリ稽古セザル者ト視做ス可シ  
但シ其二三戦ニテモ上等ノ魚ヲ得レ代ハコレ  
ヲ入數ノ内ニ計込ムヘシ○稽古ノ終ラントス  
ル代ニ至テ俄ニ大雨ニア稽古ヲ止レバ的ト帳  
面ト引合セテ中リノ点數ヲ計ヘ置キ他日其稽  
古ノ残ヲ終ル可シ

三十 稽古ノ場所ヘ立合フ人ハ放戻スル所ノ

右ノ方へ立ツ可シ且其兵卒ニ近ツクトナク何等ノトアルトモ聲ヲ戦シコレト談話スルヲ許サズ

三十一 生兵ハ右ニ述タル玉打ノ稽古ニ九十發ヲ費シ練兵モ毎年定式ノ稽古ニ於テ同九十發ヲ費ス其割合左ノ如シ

一人立チノ放戦

六十發

連戦

十發

急戦

千發

戦列ノ放戦

十發

三十二 一人立チノ放戦ニ於テ費ス玉ノ數、的ノ遠近大小星角ノ寸法左ノ如シ  
的ニツ合セタルモノ

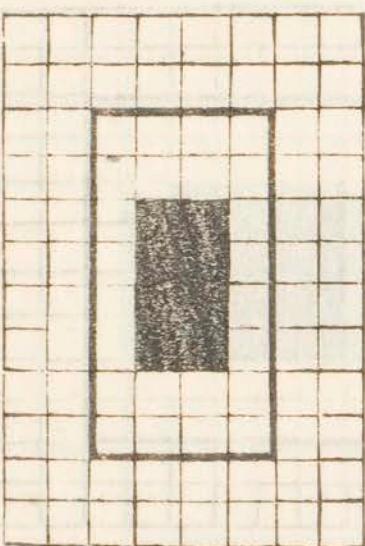
練 兵 生  
五百五十ヤールド

兵 一百五十ヤールド

兵 一百五十ヤールド

兵 二百五十ヤールド

兵 三百五十ヤールド



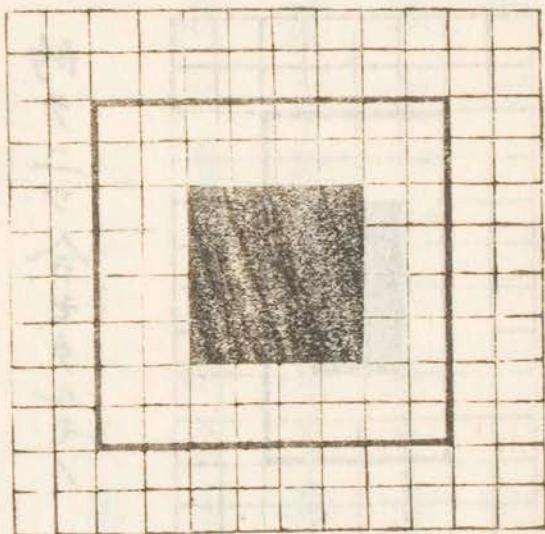
第三等

練	兵	生
兵	百	百
二	二	五
百	百	十
一百	五十	發
五十	ヤールド	
ヤールド		

各ノ興難ニヤリ難ハ

星ノ堅ニフート横ニフート  
角ノ堅四フート横ニフート

的ヲ三ツ合セタルモノ



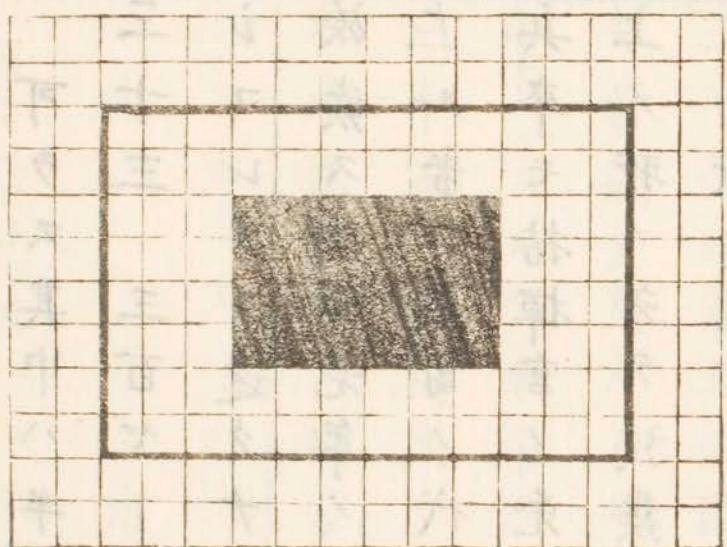
等二第

兵	練	生	二
五百	五百	三百	百五
百ヤー	百ヤー	百ヤー	十ヤー
ルド	ルド	ルド	ド
一	一	一	一

各ノ距離ニ付五ヶツ、

星ノ堅ニフート横四フート

的ヲ四ツ合セタルモノ



等一第

零イシナ五七七	ウサットウルス	兵生	
ノ雷銃及ニ馬上	ノ雷銃ヲ以テ		
筒ヲ以テ			
百五十五ヤード	六百五十ヤード	五百ヤード	五百ヤード
一	一	一	一
百五十五ヤード	六百五十ヤード	五百ヤード	五百ヤード
一	一	一	一
各ノ距離ニ付五ヶツ、			

角ノ堅ニフート横六フート  
アーフリ

星、角ヲ画クニハ的ノ面ノ刻目ヨリ外ニ出ワ可ラス其巾ハ半「インチ」ヲ限トス

三十三 三百ヤールドマデノ的ニハ立テ放戦レコレヨリ遠クナレバ或ハ跪キ或ハ匍匐シテ放戦ス但レ老年ノ士官ニテ身躰ノ屈伸不自由ナル者ハ匍匐ノ代ニ跪クヲ許ス又騎馬隊ノ兵卒モ指揮官ノ免許ヲ得レハ三百ヤールド以上ノ所ニ立テ放戦スルトアリ○兵卒ハ左ノ肩ヨリ放戦スルトテ許サス若シ右ノ眼ノ不明ナルニ由テコレヲ許スアレバ醫師ヨリ其證書

ヲ出ス可シ

三十四 步兵差団役ハ長キ雷銃ヲ用ルトモ短キ雷銃ヲ用ルトモ勝手次第大レヒ一度ノ稽古中ニコレヲ取替ルトテ許サズ

三十五 生兵及ヒ練兵放戦ノ中リニ由テ登級スル息數左ノ如シ

中リノ点數

口径零「インチ」五七七ノ  
「イシブヒールド」雷銃及ヒ

諸種ノ馬上筒ヲ以テ  
ノ雷銃ヲ以テ

三等ヨリ二等へ登級ス

三十

三十

二等ヨリ一等へ登級ス

三十

四十

一等ノ者ハ褒美ヲ得ル

二十

三十

三十六 少年士官、生兵ハ規則ノ通り下<sub>ト</sub>稽古ヲ為シ終ラサレバ、玉込ノ放戻ヲ許サス、練兵ト並氏年々定式ノ試戻ヲ為ス。前ニハ必ス下<sub>ト</sub>稽古ヲ終ラサル可ラス。

三十七 ケ年士官、生兵、練兵、共ニ下稽古ノ時ニ故障アリテ年々報告書ノ出来ルマデニ一箇条ニテモ稽古セザルトアレハ必ス其次第ヲ記シ置ク可シ。

甲 一人立チ放戻ノ放戻

三十八 一人立チ放戻ノ第一期ニ於テハ生兵ハ五十「ヤード」ヨリ二百「ヤード」マデ次第ニ五十「ヤード」ゾ、増シテ放戻シ練兵ハ百五十「ヤード」ヨリ三百「ヤード」マデ右同様ノ割合ニ距離ヲ増シテ放戻ス。

三十九 右第一期ノ稽古ニテ取りシ点ヲ集テ帳面ニ記シ置キ其点數多キ者ハ第二等ニ登級レ点數ノ少クシテ登級スルニ足ラサル者ハ三等ニ居テ又稽古ヲ繰返ス。

四十 第一期ノ稽古終テ第二期第三期ノ稽古  
ヲ始ル時ニ登級セシ兵卒ノ名前。并ニ其点数ヲ  
稽古人ノ前ニテ指揮官讀聞カス可シ

四十一 第二期ニ於テハ第二等ト第三等トニ  
組ニテ放戻ス

四十二 第二期ノ放戻終レハ各中リノ点ヲ計  
テ其数ヲレバ二等ノ者ハ一等ニ登級シ三等ノ  
者ハ二等ニ登級ス

四十三 第二期ノ稽古ニ於テ三百「ヤード」以  
上ノ放戻ヲ為サドル時ハ第二等ノ者モ第三等

ノ稽古ヲ為ス可シ但シ第三等ノ的ハ二枚相合  
セタルモノナレ此今ヨニ用ルモノハ豎六「フ  
ート」横ニ「ブート」ノ的一枚ナリコレニ第三等ノ  
星ト角トヲ画キ中リノ数三十六点以上ナル者  
ヲ第一等ニ登級セシム可シ

四十四 第三期ノ稽古ニ於テハ第一等第二等

第三等ト三組ニ分テ放戻ス

四十五 稽古終レバ中リノ点數ヲ計テ等級ヲ

定ルト以前ノ如シ

四十六 第一等ノ者「インスールド」雷銃ヲ以テ

二十点ヲ取り「ウサツトウル」雷銃ヲ以テ三十点  
ヲ取ル氏ハコレヲ一番ノ中リト名ケテ褒美ア  
リ但シ遠近見斗ヒノ稽古ニ於テ上等ノ部ニ入  
ラザリシ者ハ放戦ノ稽古ニテ点ヲ得ルトモ一  
番ノ中リト名ケズ

乙 連戦

四十七 生兵練兵共ニ前後二列ニ並テ四百「ヤ  
ールド」ノ的ニ向ヒ跪テ放戦スルヲ各、十戦ヅ、  
ナリ但シ短キ雷銃ヲ携ル氏ハ前列ノミ跪クベ  
シ

四十八 連戦及ヒ急戦ノ稽古ニ於テハ的ヲ六  
枚並ヘテ其中程ニ巾ニ「ブート」ノ黒キ筋ヲ左右  
一文字ニ引きキコノ黒キ町ニ中ルモノヲ四点ト  
シ其外ニ中ルモノヲ二点トス

四十九 連戦、急戦ノ人數ハ二十人ヨリ多カル  
可ラス五人ヨリ少カル可ラス

五十 連戦ノ片一人ノ放戦ニ点火ヲ誤ルヲアル  
トモ改テ放戦スルヲ許サス其玉ハ放戦セシ  
モノト同様ニ見据テ數ノ内ニ計へ込ムヘシ連  
戦ヲ始ル氏ハ何等ノ差支アルトモ其列ヨリ外

ル、ヲ許サス何等ノ出来不出来アルトモ中  
リノ懲数ヲ計ヘコレヲ懲入數ニ割付テ平均ス  
可シ

五十一 連戦及ヒ戰列ノ放戦ニ於テハ第三等  
ノ兵卒コレマデ三百「ヤード」ヨリ遠キ的ニ放  
戦セザリシ者アルガ故ニ遠丁ノ的ニ應シテ粗  
ヒノ加減ヲスルヨウ意ヲ用ニ可シ

五十二 騎馬隊ノ兵卒ハ連戦及ヒ急戦ノ稽古  
ヲ為サズ

丙 急戦

五十三 此稽古ニ於テハ生兵共ニ練兵三百「ヤ  
ード」ノ所ニ急戦スル「十戦ツ」、ナリ練兵ヘ  
ハ前以テ粗ヒノ加減ヲスルヲ許サスシテ放  
戦ヲ始ントスル氏急ニコレヲ加減セシメ或ハ  
放戦ノ間始終後ノ粗ヒヲ用ヒサルアリ但シ  
後ノ粗ヒヲ用ヒズトハ虽氏粗ヒノ箱ト前ノ粗  
ヒトヲ見通シテ目當ヲ定ム可シ○放戦ノ時刻  
ヲ測ルニハ打方始めトノ号令ノ言葉ヲ相図ニ  
シテコレヨリ放戦ノ終ルマテ時計ヲ以テ時ヲ  
計テコレヲ記シ置ク可シ

五十四　急戦ノ趣意ハ左ノ布告文ニ記シタレ  
バ其文面ノ意ヲ稽古人ヘ說辨シ稽古ノ大切ナ  
ルヲ合點セシム可シ

千八百六十一年第五月二日雷銃稽古ノ

布告文

將軍思フニ近年ノ戰爭ニ於テ雷銃ヲ携タル  
兵卒ノ十分ニ功ヲ成サドルハ武器ノ利ナラ  
サルニ非ラスコレヲ用ルノ巧ナラサルナリ  
ト○雷銃ノ功能ヲ益體ニスルタメ百ヤール  
ドヨリ九百ヤールドマテノ割合ニテ後ノ組

ヒヲ附タリ故ニ此組ヒノ取扱ヲ心得。遠近見  
斗ヒノ術ニ達シテ身軀ヲ定メ精心ヲ安シテ  
放戦スレハ雷銃ノ功ヲ成ス。ト疑ナキ苦ナリ  
○然レ氏接戦ノ戦ニ當テハ人氣動乱シテ平  
生ノ考ニ異ナルモノアレバ今般兵卒ヲ指揮  
スル士官其外ノタメ戰場ノ規則ヲ設テ後來  
ハ同列ノ放戦ト連戦トヨ劇シク急ニス可シ  
○右ノ次第ニ付三百ヤールド以下ノ所ニ放  
戦スルニハ狃ヒノ板ヲ起サズシテ其箱ト前  
ノ狙ヒトヲ見通シ練磨ノ手心ニテ勾配ヲ定

ム可シスノ如クスレハ急場ノキニ臨テ前後  
ノ狙ヒヲ本法ニ見通ス丈ケノ手間ヲ省クナ  
リ○三百ヤールド以上ノ町欽又ハ距離ノ遠  
近ニ拘ラズ塹牆木蔭等ヨリ放戦スル代ハ前  
後ノ狙ヒヲ正シク合セテ勾配ヲ定ム可シ  
將軍ヨリ命令アリ。甲比丹及ヒ中隊ノ士官ハ  
此規則ヲ無級士官、兵卒等へ説辨シテ戰場ノ  
心得ト爲シ且又都テ士官タル者ハ遠近見斗  
ヒノ術ニ達シ雷銃ノ真ノ勲ヲ知ル可シ○チ  
ビレヨン兵ノ合セタブリゲード四大隊ヨ  
六大队ニ矣隊ノ名

歩兵砲ヲ又ハ屯所ヲ指揮スル高位ノ士官  
ハ時々其兵隊ヲ見廻リテ中隊附属ノ士官等  
ガ遠近見斗ヒノ術ヲ知リ雷銃放戦ノ議論ト  
業前トニ達スルヤ否ヲ嚴シク吟味ス可シ此  
箇条ヲ心得サレバ雷銃モ真ニ其用ヲ為スト  
能ハス諸士官若シ此趣意ニ從テ心ヲ用ヒナ  
バ雷銃ハ接戦ニ於テ其効、固ヨリ恐ル可モ  
ノナリ或ハ又大砲隊ニ對シテモ九百ヤール  
ドマテノ距離ナレバ大砲ノ玉先ヲ挫クニ足  
ル可シ

右ハ將軍ノ命ニ由テ記スモノナリ

副將軍ゼームス・ヨーク・スカルレット

### 丁 戰列ノ放戦

五十五 生兵及ヒ練兵戰ノ列ヲ尋シテ各、十戦ツ、ヲ費ス其法、的ヲ距ルト四百「ヤールド」ノ射ヨリ二百「ヤールド」ノ射ニ進ミ又二百「ヤールド」ノ射ヨリ四百「ヤールド」ノ射ニ退キコノ進退ノ間ニ右ノ十戦ヲ放ツナリ但シ兵卒ハ各、自分ニテ遠近ヲ見斗ヒ其粗ヒヲ加減ス可シ

五十六 此稽古ニ於テハ的ト的トノ間ヲ六歩ツ、離シテ六個又ハ八個ヲ先ラベ兵卒一列毎ニ其一個ヲ用ユ的ノ中程ニ中ニ「アート」ノ黒キ筋ヲ一文字ニ引キコノ筋ニ中ル玉ヲ四点トシ其上下ニ中ル玉ヲ二点トス

五十七 進ミナガラ放戦スル代ハ跪キ玉込ヲスルニハ立ツ但シ放戦先ニ玉込ノ代ハ立留ルトナレ氏玉込終テ込矢ヲ返セハ直ニ走テ列ニ遂付キ用意トノ樹聲ヲシテ雷管ヲ附ク○退キナガラ放戦スル代ハ絶テ跪クトナシ

五十八　的ノ左右四五十ヤールドノ所ニ見廻  
リノ者ヲ置テ往來ノ人ノ彈道ニ出ルヲ差留ベ  
シ  
五十九　戦列ノ放戦、連戦、急戦ノ稽古ニ於テ其  
試験終レバ中隊ノ教師、他ノ組合ノ無級士官ト  
共ニ的ノ所ニ行キ甲比丹ノ立合ニテ中リノ數  
ト場所トヲ改テコレヲ系引ケイビキノ紙ニ寫シ尚又的  
ニ引合セテ相違ナケレバ右ノ教師ト無級士官  
トニテコレニ調印シ中隊ノ指揮官又コレニ裏  
印ヲ記ス○中リノ点數ハ一隊毎ニ別ニシテコ

レテ小競稽古試験ノ報告ト名クル書面ニ記シ  
置ク可レ

六十　前条ノ如ク中リノ數ヲ系引ノ紙ニ記セ  
バ師範役モヨレテ其手帳ニ書留メ報告ノ書面  
ニ寫シタルモノト双方相違ナキイノ證據ト為  
ス可レ

六十一　一人立キノ放戦ニ於テ第一期ノ業ヲ  
成サドリシ者ヘハ連戦、急戦、戦列ノ放戦ヲ許サ  
ス又第一期ノ業ヲ終テサル者ヘハ固ヨリ第二  
期第三期ノ稽古ヲ許スヘナシ

六十二 試験ノ終ニ至テ階級ヲ定ル時第三等ニ居ル者ハ再ヒ又卒ニ返テ粗ヒノ稽古ヨリ始ノ身構ヘノ稽古、空戔ヲ為スト生兵ノ如クシ次テ放戔第一期ノ試験ニ掛ル可シ但シ斯ク稽古ヲ繰返ストモ其兵卒ヲ罪スル訣ニモアラバ其面目ヲ失ハシムルトニモ非サレハ心得違テ不可ラス○右ノ如クニ度目ノ稽古ヲスル者ハ生兵ト打交レトハ重氏其帳面ニ記ス所ヲ別ニヒリ

六十三 一列一中隊又ハ一大隊ニテ惣人數ノ

中リナ計テ中リノ功ヲ定ルト左ノ如シ  
一人立チ放戔ノ第一期ニ得タル中リノ点數  
ヲ惣人數ニ平均シテ放戔シタル玉ノ數ニ割  
付ベシ譬へハ惣人數ニテ百戔シ其点數六十  
ナレバ六分ノ中リト云フトナ  
ルベ

連戔ノ代ニ得タル点數ヲ平均シテ放戔シタ

ル玉ノ數ニ割付ベシ

又第三期ノ終ニ至テ階級ヲ定ル代譬へハ第  
一等ノ平均ハ七分ニテ第三等ノ平均ハ一分  
ナレバ第一等ト第三等トノ差ヲ六分ト云フ

第一等ノ平均ハ七分五厘ニテ第三等ノ平均ハ五分ナレハ其差ヲ二分五厘ト云フ若シ其差、相反シテ第三等ノ平均ノ數却テ多ケレバコレヲ無差ト云フ

右ノ如ク第一期ト連戦トノキニ平均シタル中リノ割合ト第三期ノ終ニ一等ト三等ト相差フ割合トテ合セテコレヲ中リノ功ト名クルナリ

左ノ表ハ「インスール」雷銃ヲ以テ放戦シ、中リノ点數ヲ平均シテ其割合ニ上中下ノ段等ヲ

付タルモノナリ

		極上	上	中	下
第一期		四分	三分六厘	三分	同以下
連戦		二分	一分六厘	一分	同以下
一等ト三等トノ差	四分	三分	一分六厘	一分	同以下
中リノ功	十分	八分	五分	同以下	同以下
七分時以下ノ急戦	一分八厘	一分五厘	一分二厘	同以下	同以下
戦列ノ放戦	一分二厘	九厘	六厘	同以下	同以下
六十四 急戦及ヒ戦列ノ放戦ハ中リノ功ニ加入セサレ凡歩兵ノ調練ニハ最モ大切ナル箇条					

ナリ故ニ總督ノ指揮官ハ半年毎ニ諸軍隊ヲ見  
廻リ其時臨機應変ニ諸隊ノ内ヨリ入數ヲ呼出  
シテ十列斗モ集メ後ノ粗ニヲ用ヒズシテ急疾  
ノ稽古ヲ十疾ワヽ試ム可シ斯ク試ミシ上ニテ  
其試験ノ出来不出来ハ定式ノ帳面ニモ記シ又  
指揮官ノ手帳ニモ留置キ指揮官ヨリ其筋ヘ別  
段ニ報告ス可シ

左ノ表ノ如クス		雷鏡ノ玉利或		三百ヤーハ		ル四百ヤー		ハド	
		第一期		第二期		第三期		試驗ノ數	
王放戦可キ	七十	七十	七十	一	一	一	一	一	一
米	スドヤ「第 可ノ一ニ シル等 ニドノ ト者 戦四八 ツ百三 、ヤ「百 放一五 戦ル十	ル百放一驗二第 ドヤ「戦ルヲ放二 ト一レド為戦等 ノル戰ノシシノ 間ド列折連テ者 ニトノニ戦第八 於二放立八三一 ア百戦ナ十三等個 スヤ「ハガ百ノノ 一三ラヤ「試的	シキ三終コ 氏期テ、 ハノ其ニ コ試的記 レ驗場セ ラヲノル 施為摸試 入ス様驗 可可第ヲ	ス	ス	ス	ス	ス	ス



堅ク守ル可キモノナリ又土地ノ模様ニ由テコノ規則ヲ変スルトアレバ其趣ラ場所ノ總督ニ訴ヘ總督ヨリコレヲ將軍ニ報ス可レ

放談ノ場所ニ在ル老士官ヘノ規則第一 紅色ノ大旗ヲ高キ柱ヘ引揚ケ見廻リノ者ニ命レテ彈道ヘ人ノ出ルト防ケ手配ヲ爲スマデハ必ス放談ヲ許ス可ラス

第二 兵卒ノ玉込ヲスルト順序ニ從ヒ号令ノ言葉ニ應スルヤ否ヲ見ル可シ

第三 一人放談レテ的ニ中レバ其相図ヲ見ル

マデハ次ノ者ヘ放談ヲ許ス可ラス  
第四 的場ニ红旗ヲ揚レバ直ニコレニ應シテ旗ヲ揚ケ止談ノ相圖ヲ放チ的場ノ旗ヲ下スマデハ放談ヲ許ス可ラス又放談ノ玉先ヘ不意人ノ出或ハ獸類ノ走ルヲ見ル代モ同様ニ放談ヲ止ベシ○的場ノ红旗ヲ下セバ放談ノ場ニテモ始談ノ相圖ヲ放チ旗ヲ下ス可シ

第五 的ノ場所左右ニ相並ヘバ放談ノ場所モ左右ニ相並ヘテ稽古人ノ組合ニ何レモ其距離ナ一樣ニセシメ上等ノ者ヨリ先ツ放談セシム

可レ

第六 前条ノ如ク放戻ノ場所左右ニ相並フ代  
其一方ニテ止戻ノ相圖ヲ放テバ両方トセニ放  
戻ヲ止ム可レ的場ノ旗ヲ下シテ始戻ノ相圖ヲ  
放ツキモ同様ナリ

第七 放戻ヲ見物セント歇スル者ハ稽古人ノ  
所ヲ離レテ其右ノ方ヘ立シム可レ且稽古人ハ  
業前ニ心ナ用ルノミニテ互ニ談話スルヲ許  
サス

第八 稽古ノ間都テ不規則ノトナク殊ニ稽古

人ノ列ヲ乱ルトナクシテ若シ不意ノ誤アル片  
ハ手早クコレヲ防クヨウ心附ベシ

第九 的場ニ於テ止戻ノ相圖ヲ為スニハ必ス  
紅旗ヲ用ヒテ間違ナキヨウ心附ベシ

的場ニ居テ中リヲ見ル無級士官ヘノ

規則

第一 紅色ノ大旗ヲ高キ柱ヘ引揚ケ見廻リノ  
者ニ命シテ彈道へ人ノ出ルヲ防ク手配ヲ為  
スマデハ必ス放戻ヲ許ス可ラズ

第二 玉ノ中リ跳躍用心止戻ノ相圖ヲ為スニ

ハ左ノ通り色々ノ旗又ハ圓キ板ヲ用ヒテ間違

ナキヨウ心附ベシ

自旗ヲ用ル欵又ハ黒キ圓板ヲ用ユ圓

板ヲ用ルニハ先ツコレヲ的ノ脇ニ示角外

第一レ次テ玉ノ中リタル所ノ前ニ出ス

紺色ノ旗或ハ黒色ノ圓キ板

角内

紅白ノ旗或ハ白色ノ圓キ板

星

第二的ノ前ニテ红旗ヲ二度振舞ハス

跳躍

### 第三红旗

用心  
正義

第三 風ノ向、或ハ上ニ吹キ或ハ下ニ吹クトモ  
旗ノ振様ヲ変ス可ラス的ノ右ノ方ヘ中レハ旗  
ヲ右ノ方ヘ傾ケ左ノ方ヘ中レハ左ノ方ヘ傾ク  
的ノ上ノ方ヘ中レハ旗ヲ成夫ケ高ク揚ケ下ノ  
方ヘ中レハ旗モ人ノ目ニ見ユル夫ケ少シ揚ク  
ヘシ又旗ノ代ニ圓キ板ヲ用ル代玉ノ中リ角外  
ナレハ先ツコノ板ヲ的ノ脇ニ示レシ次テコレヲ  
中リノ前ノ所ニ出ス可シ

第四 的ヲ塗替ル欵又ハ其他要用ノタメ放羨  
ヲ留ント欲スル代ハ用心ノ红旗ヲ引揚ベシコ

ノ旗ニ應シテ放幾ノ場所ヨリ止幾ノ相圖ヲ放  
ツ欵又ハ紅旗ヲ揚ルマデハ何等ノ急用アリト  
モ玉見ノ小屋ヨリ入ヲ出ス可ラス○玉見ノ者  
小屋ヨリ出ル欵或ハ其外ノ人。彈道ニ在ル間ハ  
始終紅旗ヲ引揚ケ置キ尚又ヨク人ノ目ニ示サ  
ンガタメ時々コレヲ動カス可シ

第五　彈道ニ掛念ノヲナケレハ直ニ用心ノ旗  
ヲ下ス可シ

第六　彈道ノ差圖ヲ司ル老士官ノ命ニ非サレ  
バ當番外ノ者ヲ玉見ノ小屋ヘ入ル可ラス又小

屋ヘ出入スルニモ必入歩法<sup>アキヨウ</sup>ヲ正シクス可シ

第七　小屋ノ内ニハ談話ヲ禁ス

第八　見廻リノ者高キ所ヨリ旗ヲ揚ケ又ハ聲  
ヲ蘇シテ玉先ニ人ノ通行シ舟ノ來ル等ノヲ  
報スレハ的場ニテ直ニ紅旗ヲ引揚ケ頻ニコレ  
ヲ動カス次テ又掛念ノモノ通過キシトノ相圖  
ヲ見レハコレヲ下ス可シ

第九　第一等第二等ノ兵卒放幾スル代ハ玉見  
ノ者ハ成文ケ小屋ノ奥ニ入テ玉ノ落掛ルヲヲ  
避<sup>ク</sup>可シ<sup>ユ</sup>ヘ<sup>第一等</sup>第二等ノ者ハ遠丁<sup>ニ</sup>放幾スル  
高<sup>タ</sup>諸<sup>テ</sup>的<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>放<sup>ク</sup>至<sup>ル</sup>ハル

上ヨリ下へ斜  
落ルナリ

見廻リノ者ヘノ規則

第一 人ノ何處ニ居リ。何處へ行キ。何處ヨリ來ルヲ見張リテ自分所持ノ红旗ヲ揚ケ大聲ヲ號シテ玉見ノ小屋ニ居ル無級士官へ用心ト呼ヒ其人ノ通過テ掛念ナキニ至ルマデハ旗ヲ繩ス可シ又海ニ向テ放糸スルキ通行ノ舟ヲ見テモ同様ニ相圖ラ為ス可シ

第二 放糸ノ氏蹕道へ往來ノ人ノ近ツクヲ見掛けナバ其危キ趣ヲ知ラセ相圖ラ以テ其人ヲ

本ノ路へ返ス可シ

第三 放糸ノ玉的ニ届カスレテ地面ニ觸レ又飛揚テ的ニ中ルヲアラハ大聲ヲ號シテ跳躍ト呼フ可シ

第四 放糸ノ場所ニアル紅旗ヲ見張リ若シコレヲ揚ルヲアレバ玉見ノ小屋ニ居ル無級士官ヘ旗揚ルト呼フ可シ

第五 右ノ役前ヲ勤メ處々徘徊スルキハ成夫ケ躰ヲ低シテ跳躍ノ玉ニ中テラレザルヨウヨレヲ避ク可シ殊一戰列ノ放糸ニ於テハ格別用

心セザル可ラス

雷銃操法卷之二終

慶應三年丁卯暮春

東都書林

和泉屋善兵衛兌

發

福

3-1

著作